
文音ちゃんとようせいの国

村上 悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

文音ちゃんとうせいの国

【Nコード】

N0080V

【作者名】

村上 悟

【あらすじ】

自分の娘のために書いた冒険物語です。

かなりプライベートな設定もありますが、これも思い出と思います（もちろん、個人情報漏れない範囲で）のでアップデートします。

ちなみにこちらの縦書きPDFが非常に魅力的だったのでリアルタイム仕様です。

お付き合いいただける方はどうぞ一緒にご覧ください。

その1 文音ちゃん妖精にあう

文音ちゃんは那珂南なかにみなみ小学校の一年生です。

きょうも、はるかお姉ちゃんといっしょに、学校に行きます。でも、きょうはいつもと少しだけちがうことがありました。

さっきから、後ろうしろにだれかついてくるのです。

はるかお姉ちゃんは、まだそのことに気がついていませんが、文音ちゃんにはわかるのです。

「ねえ、はるか姉ちゃん。なんだか変へんだよ」

文音ちゃんは、はるかお姉ちゃんに言いました。

「何が変なの？」

はるかお姉ちゃんは何も気がついていません。でも、文音ちゃんには分わかるのです。

さっきから文音ちゃんたちについてくるのは、とっても小さくて毛けむくじやらで、目の小さい、かわいい生き物いきものだったからです。

（これは、ふつうの生き物じゃないぞ。でも変なことをしてくるわけでもないし……）

だれにも見えない不思議ふしぎなおっさん小人こびとのことを、文音ちゃんは知りたくなりました。

そのときは、はるかお姉ちゃんがいたので話はなしかけられなかったのですが、学校のかえりにもその小人はついてきていました。

そこで、文音ちゃんはだれもない時ときに小人さんに聞ききました。

「あなたはだれなの？」

小人は、人なつっこい顔かおを、優しくやさにつこりさせながら、文音ちゃんに言いました。

「ぼくはブラウニー、妖精ようせいさ。君きみをむかえにきたんだ。ぼくといっしょに来てくれないかな」

文音ちゃんはびっくりしました。妖精という言葉はなんとなく知っていましたが、本当にいるとは思わなかったからです。

「あなたは、本当に妖精なの？」

文音ちゃんは聞きました。ブラウニーは大きく頭をふって、そうだよ、と言いました。

その日は、そこまででお家につきました。文音ちゃんは明日もお話しすることをやくそくして、バイバイしました。

その夜、文音ちゃんは父に少しだけ聞きました、

「チチ、妖精っているの？」

父はいろんなことを知っています。

父はこんなお話しをしてくれました。

「妖精はいるよ。でもね、妖精はずっと昔にいじめられてしまったから、やさしい子供のところにならなしか来ないんだ。妖精はウソはつかない。助けてあげるときつと、いいことがあるよ」

すると、母がお話しに入ってきました。

「妖精の話でもいいけど、あまり危ないことをおしえないでね」

母は、文音ちゃんが危ないことにならないか、いつも心配なんです。文音ちゃんのことを一番大事にしてくれているのは、母でした。怒ってばかりだけど、いつも文音ちゃんのことをかんがえてくれています。文音ちゃんのことを大好きなんです。

文音ちゃんも母がきびしくても、文音ちゃんのことを一番にかんがえてくれているのを分かっています。

でも、恥ずかしくて、つい文句を言っちゃいます。

文音ちゃんの頭の中には、二つのことが思い出されていました。

一つは、妖精はわるいものじゃないこと。

一つは、母と父はいつでも文音ちゃんの味方だということ。

それだけでまんぞくして、文音ちゃんは眠ってしまいました。

次の日、学校がおわってから、文音ちゃんは「はるか姉ちゃんと

公園に遊びに行く」と言つて家を出ました。

母にウソをついたのは初めてでした。ドキドキしました。

公園には、ブラウニーがまっています。

ブラウニーは言いました。

「さあ、文音ちゃん。ぼくといっしょに妖精の国に来て、妖精の女王を助けてくれないか」

文音ちゃんはとて、こわいと思いました。だって、妖精の国に行けば、父と母、それに樹音と別れてしまうからです。

「でも、こわいよ。父や母とはなればなれになっちゃうの？」

ブラウニーは言いました。

「大丈夫だよ。文音ちゃんが帰りたいと思えば、いつでも帰れるし、その間は時間がとまっているんだ」

文音ちゃんはそれを聞いて安心しました。だったら、困っている人を助けるのは、とっても素敵なことだともいえました。

「文音は、ブラウニーといっしょに、妖精の国に行くよ。それで、みんなを助けてあげる」

文音ちゃんがたすけてくれるを分かつて、ブラウニーはよろこびました。

「文音ちゃん、ありがとう。ぼくがいる妖精の国は、いま、わるい魔女におそわれているんだ。だから、大魔法使いの力をもっている文音ちゃんが来てくれると、とってもうれしいよ」

こうして、ブラウニーと文音ちゃんは妖精の国に旅立って行ったのでした。

その2 文音ちゃん妖精の国につく

ブラウニーは一文音>あやねくちゃんを妖精>ようせい<の国>く<につれていきました。

「さあ、この一穴>あなくを一通>とおくって」

そこらへんの木の穴をつかんで、ブラウニーは一広>ひろくげるようなしぐさをしました。

すると、木の穴がボコンと広がって、穴が大きくなりました。

「わあ、すごい」

文音ちゃんはびっくりして、穴をのぞいてみました。そこには大きな暗闇>くらやみ<だけがありました。

「まっくらだね」

「まっくらだよ、こわい？」

「うん、一少>すく<しこわい」

ブラウニーは、文音ちゃんの手をぎゅつとにぎりました。

「大丈夫>だいじょうぶ<だよ。一僕>ぼく<がいつしよだから文音ちゃんは「うん」とうなずきました。

「二人>ふたり<は「えいつ」と一声>こえ<をあげて、穴に「飛>とく<び一込>こく<みました。

すると、まわりが一急>きゅう<くにポワポワしはじめて、一手>てくも一足>あしくもグニヤグニヤになりました。お一互>たが<いの一顔>かお<をみても、グワングワンにゆがんでいて、文音ちゃんもブラウニーも一笑>わらく<てしまいました。

そして、気がつくと文音ちゃんは一青>あおい<一空>そらく、一丸>まる<い木のはえているところに一立>た<くっていました。「ついたよ、文音ちゃん。ここが妖精>ようせい<の一国>くに<だよ」

ブラウニーが言うとおり、ここは文音ちゃんが一知>し<くって

るのとはちがう―世界>せかい<でした。

だって、なにもかもがまん―丸>まる<くて、かわいらしいのですから。

「なんだか、―素敵>すてき<なところだね、ブラウニー」

「一本当>ほんとう<？ ―気>き<くに―人>い<くってもらえてよかったよ。じゃあ、―女王>じょおう<さまのところに―案内>あんない<するね」

ブラウニーは文音ちゃんの前>まえ<に立って、一歩>ある<きはじめました。

ふと見ると、木のえだにまん丸な―体>からだ<をした―鳥>とり<がとまっていました。

―頭>あたま<には―七色>なないろ<の―羽>はね<がはえています。それがおひさまの―光>ひかり<をあびて、キラキラと光っていました。

「その―子>こ<が―大魔法使>だいまほう<つかうのかい？」
鳥がブラウニーに―話>はな<しかけました。文音ちゃんはびっくりしました。だって、鳥はしゃべらないものだったからです。

「そうだよ、メル。とてもそんな―風>ふう<には見えないだろうけどね」

ブラウニーは、その鳥のことを「メル」とよびました。

そして、メルとよばれた鳥は、木から―飛>と<んできて、文音ちゃんの―肩>かた<にとまりました。

「ふうん、なにも―感>かん<じないけどなあ」

ジロジロと文音ちゃんのことを―見回>みまわ<します。文音ちゃんはなんだか、いやな―気分>きぶん<になりました。

「まだ、―魔法>まほう<の―力>ちから<にめざめてないからね。女王さまに―会>あ<えば、すぐに力をとりもどすよ」

ブラウニーは文音ちゃんの―気持>きも<ちに気付かず―笑>わら<っています。

どうしよう、と―考>かん<がくえながら、文音ちゃんはいっしょ

に歩いていきました。

「早くはやくもすこし後悔くごうかいしはじめています。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0080v/>

文音ちゃんとうようせいの国

2011年7月31日03時28分発行